

ミカ書1-4章「公義に満ちた預言者」

1A エルサレムの門に至る災い 1

1B 聖なる宮から降りられる主 1-4

2B ヤコブの背きの罪 5-16

1C 廃墟となるサマリヤ 5-7

2C 嘆く預言者 8-9

3C 侵略者が送られるユダの町々 10-16

2A 貪りへの裁き 2

1B 相続地の強請 1-5

2B 「戯言」という批判 6-11

1C 罪を許容されない主の霊 6-7

2C 偽りの安らぎ 8-11

3B 残りの民の招集 12-13

3A 民を食い物にする頭たち 3

1B 首領たちの搾取 1-4

2B 預言者たちによる惑わし 5-8

3B 偽りの神学 9-12

4A 終わりの日のシオン 4

1B 主の言葉による統治 1-8

1C 異邦の国々に及ぶ平和 1-5

2C 足なえの回復 6-8

2B 敵の手からの救い 9-13

1C バビロンからの帰還 9-10

2C 包囲からの救い 11-13

本文

ミカ書を読んでいきます。ミカ書は、少しアモス書に似ています。アモスが、大きなイスラエル王国に対して、ユダの町の小さな村テコアで羊飼いをしていただけの者が、神のことばを預かって語りました。アモスは、神の公義について、そこで腐敗している権力者に対して語りました。ヘブル語では、公義は「ミシュパート」と言います。これは裁きという意味ですが、それだけでなく「統治する」という意味でもあります。本来は、上に立っている者たち、権威が与えられた者たちは、「悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめる(1ペテロ 2:14)」ために立てられているにも関わらず、彼らが悪に手を染めているという問題です。これは、人間誰もが持っている罪の性質であり、自分が自由にしていよもの、その力が与えられると自分の欲のために使っていくという罪深さです。そこで、アモスは、獅子のように吼えました。彼のような、何でもない小さき者たちが、山のように強く、大きい

権力のある者たちに対して、まっすぐに、真正面から語りました。

ミカも同じような、公義と、勇気と、主の霊に満たされた預言者でした。モレシエテという小さなユダの町から出た預言者で、彼はサマリヤも触れますが、ユダとエルサレムの頭たちに対して、はっきりと語ります。そして、彼は小さき者たちが、結局は残りの者として神の国を受け継ぐことを話します。あの有名な、キリストがベツレヘムから出てくる預言を行なうのもミカです。ベツレヘムも、何でも無い小さな町でした。私たちが、大きなもの、圧倒的な力のあるものに取り囲まれていても、確実に主は弱き者、小さき者たちを通してご自分の働きを進められるということでもあります。

1A エルサレムの門に至る災い 1

1B 聖なる宮から降りられる主 1-4

1 ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシエテ人ミカにあった主のことば。これは彼がサマリヤとエルサレムについて見た幻である。

ミカが現れた時代は、「ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代」です。ヨタムが紀元前 750 年から 732 年まで、アハズが 732 年から 716 年まで、ヒゼキヤが 716 年から 687 年までです。ホセアやアモスが預言していたのは、ヤロブアム二世の治世ですが、その時はウジヤがユダの王でした。ウジヤの次がヨタム王です。ヨタムは善王でしたが、治世そのものは短かったです。そしてその後がアハズ王ですが、彼がユダの王の中でマナセに次ぐ極悪でありました。アッシリヤが北イスラエルを攻めてくることを、むしろ引き寄せたのは彼自身であり、アッシリヤがイスラエルを倒した後、ユダの町々にも攻めてきます。しかし、アハズの後のヒゼキヤが、実に、ミカの預言を聞いて、悔い改めたことがエレミヤ書に書かれています。「エレミヤ 26:18-19 かつてモレシエテ人ミカも、ユダの王ヒゼキヤの時代に預言して、ユダのすべての民に語って言ったことがある。『万軍の主はこう仰せられる。シオンは畑のように耕され、エルサレムは廃墟となり、この宮の山は森の丘となる。』そのとき、ユダの王ヒゼキヤとユダのすべての人は彼を殺しただろうか。ヒゼキヤが主を恐れ、主に願ったので、主も彼らに語ったわざわいを思い直されたではないか。」このことによって、エルサレムが廃墟となるのは、125 年先に引き伸ばされました。(701 年にアッシリヤ包囲、しかし救われる。586 年にエルサレム破壊。)

「モレシエテ」という町ですが、エルサレムから南西 35 ㎞の、シェフェラと呼ばれる低地にある小さな町です。後で、アッシリヤによって踏み荒らされる町の一つとして出てきます。私は、2010 年と 2013 年の聖地旅行で、シェフェラ地方を旅して、モレシエテの遺丘も目にしました。ユダの山地から地中海沿いのペリシテ人の平野の間にある、なだらかな斜面のところ。エルサレムがユダの山地の上にある自然要塞に囲まれたところですが、シェフェラは、南はエジプトやクシュなどの外敵が、そして北からもアッシリヤやバビロンがまずは南進して、シェフェラにあるユダの町々を攻略し、それからエルサレムを包囲するという戦略を取りました。実に、ローマが紀元後 70 年にエルサレムを包囲した時も、まずは地中海沿いに南進して、それから北西に上がってエルサレムを包

困します。ですから、自らも出身の町が奪われることを知りつつ、それがエルサレムで行っている悪のせいなのだ、という神の使信を伝えるのです。

「ミカ」という名前は、「だれがヤハウエのようであろうか」という意味合いがあります。終わりに近い7章18節でミカ自身が、「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。」と告白しているところにも、彼の主を愛する思いが表れています。

2すべての国々の民よ。聞け。地と、それに満ちるものよ。耳を傾けよ。神である主は、あなたがたのうちで証人となり、主はその聖なる宮から来て証人となる。3見よ。主は御住まいを出、降りて来て、地の高い所を踏まれる。4山々は主の足もとに溶け去り、谷々は裂ける。ちょうど、火の前の、ろうのように。坂に注がれた水のように。

ミカの預言は、「すべての国々の民」に対するもの、また、「地と、それに満ちるもの」に対するものです。主が、イスラエルとユダに対して行なわれることは、ユダヤ人だけの問題ではなく、異邦人すべてに関わって来ることだし、実に被造物全体に関わることだということです。

そして、「主はその聖なる宮から来て証人となる」とあります。エルサレムには主の宮、そしてサマリヤには偽物ですが、主の宮がありました。しかし、本質的には主は天に住んでおられ、そこに聖なる宮があります。そこから地の高い所に降りてこられます。かつては、シナイ山に降りてこられて、大いなる神の栄光が現れました。しかし、今度は裁かれるために来られます。「山々は主の足もとに溶け去り、谷々は裂ける。」とあります。主イエスは、ご再臨される時にオリーブ山に立たれ、オリーブ山は裂けます。その直前には天変地異が起こっており、山々は動いて消え去っていきます(黙示 16:20)。これは終わりの日の幻ですが、その当時、主は、二つの山、すなわちサマリヤとエルサレムに裁きを行なわれます。山は、聖書の中で不動のもの、権威と力のあるものとして比喻として出てきます(黙示 17:9 等)。主が、どんなに力あるもの、権威あるものであっても、それを溶かす力を持っていることを示しています。

2B ヤコブの背きの罪 5-16

1C 廃墟となるサマリヤ 5-7

5これはみな、ヤコブのそむきの罪のため、イスラエルの家の罪のためだ。ヤコブのそむきの罪は何か。サマリヤではないか。ユダの高き所は何か。エルサレムではないか。6わたしはサマリヤを野原の廃墟とし、ぶどうを植える畑とする。わたしはその石を谷に投げ入れ、その基をあばく。7そのすべての刻んだ像は打ち砕かれ、その儲けはみな、火で焼かれる。わたしはそのすべての偶像を荒廃させる。それらは遊女の儲けで集められたのだから、遊女の儲けに返る。

ミカは、真っ直ぐに「ヤコブの背きの罪」を語り始めます。具体的には背後に、アッシリヤがあります。サマリヤに対する主の裁きから始まり、それからユダに対する裁きへと及びます。サマリヤは、

北イスラエル王国の誇り高き都でしたが、何でもない廃墟となり、ぶどう畑となり、石も投げ入れられるところとなります。そして、その偶像礼拝に対して神は裁きを行なわれます。アッシリヤという、異教の神を拝む国によって、自らの偶像礼拝を裁かれるのです。そして、偶像礼拝には女祭司、つまり遊女が付き物で、それによって収益を得ていたのですが、今度はアッシリヤにおける異教の神の女祭司、遊女の儲けに移る、ということです。

2C 嘆く預言者 8-9

8 このために、わたしは嘆き、泣きわめき、はだしで、裸で歩こう。わたしはジャッカルのように嘆き、だちょうのように悲しみ泣こう。9 まことに、その打ち傷はいやしがたく、それはユダにまで及び、わたしの民の門、エルサレムにまで達する。

ここの「わたし」は、新改訳聖書は主ご自身のように訳していますが、それでもよいでしょう。けれども、ミカ自身の嘆きでありました。主ご自身も、嘆き、泣いておられるでしょうが、ミカは預言を行ないながら、そうなるほしくない思い、気が狂いそうな思いをもって、このことを語っていました。アモスもそうでしたが、その言葉はとてつもないものですが、彼はイスラエルの仲間に対して優しい心を持っていました。それは確かに神ご自身の心を表しておられ、神は悪者が滅びることを決して喜んでいたりなさいません。そして、「ジャッカルのように嘆き、だちょうのように悲しみ泣こう」とありますが、ジャッカルもだちょうも、廃墟や荒地に棲みつく動物として聖書に出てきており、そこに含まれている神の呪いを表しています。そして、この呪いがサマリヤに下ったのですが、それがついにユダにまで、実にエルサレムの門にまで達することを、ミカは嘆いています。

3C 侵略者が送られるユダの町々 10-16

10 ガテで告げるな。激しく泣きわめくな。ベテ・レアフラでちりの中にくろび回れ。11 シヤフィルに住む者よ。裸で恥じながら過ぎて行け。ツァアナンに住む者は出て来ない。ベテ・エツェルの嘆きは、あなたがたから、立つ所を奪い取る。12 マロテに住む者が、どうして、しあわせを待ち望めよう。エルサレムの門に、主からわざわいが下ったのに。13 ラキシユに住む者よ。戦車に早馬をつなげ。それはシオンの娘にとって罪の初めであった。イスラエルの犯したそむきの罪が、あなたのうちに見つけられたからだ。14 それゆえ、あなたは贈り物をモレシェテ・ガテに与える。アクジブの家々は、イスラエルの王たちにとって、欺く者となる。15 マレシヤに住む者よ。わたしはまた、侵略者をあなたのところに送る。イスラエルの栄光はアドラムまで行こう。

これらの町々は、すべてアッシリヤが南進してペリシテ人の町ガテまで来て、それからさらにラキシユまで行き、そこから北西にエルサレムに向かって攻めていくアッシリヤが、踏み荒らしていった町々の姿です。その悲惨と嘆きを、ヘブル語において語呂合わせで言い表しています。それぞれの町々の名称には、その意味合いがあったように、意味を持っています。日本語の名前に漢字があって、そこに意味合いがあるのと同じですね。その意味合いを日本語に訳して、新たにこの箇所を

読み直してみたいと思います。¹

ガテで告げる(ナガド)な。激しく泣きわめくな。ベテ・レアフラ(ちりの家)でちりの中にくらび回れ。シャフィル(美)に住む者よ。裸で恥じながら過ぎて行け。ツアナン(出て行く)に住む者は出て来ない。ベテ・エツエル(嘆きの町)の嘆きは、あなたがたから、立つ所を奪い取る。マロテ(苦み)に住む者が、どうして、しあわせを待ち望めよう。エルサレムの門に、主からわざわいが下ったのに。ラキシユ(早



馬)に住む者よ。戦車に早馬をつなげ。それはシオンの娘にとって罪の初めであった。イスラエルの犯したそむきの罪が、あなたのうちに見つけられたからだ。それゆえ、あなたは贈り物をモレシエテ(相続)・ガテに与える。アクジブ(座)の家々は、イスラエルの王たちにとって、欺く者となる。マレシヤ(相続)に住む者よ。わたしはまた、侵略者をあなたのところに送る。イスラエルの栄光はアドラム(逃れの町)まで行こう。

これらの町々の中で有名なのが、「ラキシユ」です。ラキシユは交通の要衝にある町であり、そして軍事戦略的にも重要な地点にあります。エルサレムから南西 45 キロにあります。ですから、彼らの罪の初めが早馬になっていますが、それは主に抛り頼むのではなく、馬により頼んだところです。ここを攻め取られたら、もうエルサレムは身近であり、それでヒゼキヤは「私は罪を犯しました。私のところから引き揚げてください。あなたが私に課せられるものは何でも負いますから。(2列王 18:14)」と言って、恐れを抱いたのです。ラキシユの遺丘には、アッシリヤがラキシユを攻めた時の跡が克明に残っています。そしてアッシリヤの王セナケリブは、ユダの町々を攻め取ったこと、ヒゼキヤが自分に贈り物をおくってきたことなどを、勝ち誇っている文章が残っています。さらに、ニネベにある、セナケリブの宮殿の壁画には、ラキシユにおいて人間を串刺しにした絵、生きたまま皮を剥いている絵が残っています。前回ヨナ書で学んだとおり、アッシリヤは非常に残虐でした。

16 あなたの喜びとする子らのために、あなたの頭をそれ。そのそった所を、はげ鷲のように大きくせよ。彼らが捕えられて、あなたから去って行ったから。

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%9F%E3%82%AB%E6%9B%B8%E3%81%AE%E7%9E%91%E6%83%B3%E3%82%92%E5%A7%8B%E3%82%81%E3%82%8B%E3%81%AB%E5%BD%93%E3%81%9F%E3%81%A3%E3%81%A6>

これは、アッシリヤに捕え移されていく悲しみを示すものです(アモス 8:10 等)。その悲しみを大きく示すために、神の裁きの時に人の死体をついばむ、はげ鷲のようにしなさいと言われていました。

2A 貪りへの裁き 2

1B 相続地の強請 1-5

1 ああ。悪巧みを計り、寝床の上で悪を行なう者。朝の光とともに、彼らはこれを実行する。自分たちの手に力があるからだ。2 彼らは畑を欲しがって、これをかすめ、家々をも取り上げる。彼らは人とその持ち家を、人とその相続地をゆすり取る。

ここでは、人々が相続地をないがしろにしている姿が出ています。土地を摂取することによって、もっと富を増し加えようとしています。これは主に対する大きな罪であることは、彼らがどのようにして、その地にいるかを思い出すと分かります。主が父祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えたからであり、彼らが約束に地に入っていく時に、主は、「地はわたしのものであるから。あなたがたはわたしのものと居留している異国人である。(レビ記 25:23)」と言われました。そして、主は割り当ての地を失うことがないように、近親者による買い戻しの権利をも与えられました。貧しくなって土地を売らなければいけなくとも、近親者が買い戻して、その名がなくならないようにするためです。そしてヨベルの年が 50 年毎にあります。その時に売買された土地は全て初めの所有者のところに帰ることになっています。相続地は、彼らがエジプトから救い出されたこと、主のものにされたことをまさに表すものでした。ですから、私たちが救われたという時に、それは「約束による相続人なのです。(ガラテヤ 3:29)」とあるのです。そのために、申命記では土地に対する戒めがあります、「あなたの神、主があなたに与えて所有させようとしておられる地のうち、あなたの受け継ぐ相続地で、あなたは、先代の人々の定めた隣人との地境を移してはならない。(申命 19:14)」

ところが、彼らはそれをことごとく、破っていたということになります。かつて、北イスラエルの王アハブが、宮殿の隣にあったナボテのぶどう畑を取り上げましたが、それと同じことをユダの人々は行っていたのです。そして彼らはその悪を、寝床で考え、朝の光と共に実行していました。心で欲することをじっくりとふとこで温めて、実行に移す様子を表しています(ヤコブ 1:15)。

3 それゆえ、主はこう仰せられる。「見よ。わたしは、こういうやからに、わざわざを下そうと考えている。あなたがたは首をもたげること、いばって歩くこともできなくなる。それはわざわざの時だからだ。」4 その日、あなたがたについて、あざけりの声があがり、嘆きの歌が起こって言う。「私たちはすっかり荒らされてしまい、私の民の割り当て地は取り替えられてしまった。どうしてそれは私から移され、私たちの畑は裏切る者に分け与えられるのか。」5 それゆえ、主の集会で、あなたのために、くじを引いて測り綱を張る者がいなくなる。

彼らの高ぶり、傲慢を主が砕かれます。アッシリヤがやって来て、彼らの土地を奪います。そして、ユダの民は取られたことを嘆き、そして土地が回復したとしても、主の集会で、「あなたのために、

くじを引いて測り綱を張る者がいなくなる」とあります。測り綱は、割り当ての地であるとか、主のものであるけれども、主のくださったものを確かめるために測ることです。自分たちが貪って奪ったものですから、その時には無いということです。自分の行なったことの報いを受けます。

2B 「戯言」という批判 6-11

1C 罪を許容されない主の霊 6-7

6「たわごとを言うな。」と言って、彼らはたわごとを言っている。そんなたわごとを言ってはならない。恥を避けることはできない。7 ヤコブの家がそんなことを言われてよいものか。主がこれをがまんされるだろうか。これは主のみわざだろうか。私のことばは、正しく歩む者に益とならないだろうか。

これは午前礼拝で取り組んだ箇所ですが、いつの時代にも直面する、人々の抵抗であります。それは、「罪に対しての言葉を持っていない預言」です。もちろん偽預言です。罪に対する裁き、神の怒りが含まれていない神学は、たとえ聞こえがどんなによくて、それは偽りです。神は愛、神はあなたの味方、神は平和・・・これらは全て真理です。しかし、人の罪に対して神が何も行なわれない、弱い存在だとすることによって、神を神でないものにしてしまいます。

2C 偽りの安らぎ 8-11

8 以前から、わたしの民は敵として立ち上がっている。しかし、あなたがたは、戦いをやめて安らかに過ごしている者たちのみごとな上着をはぎ取る。9 あなたがたは、わたしの民の女たちを、その楽しみの家から追い出し、その幼子たちから、わたしの誉れを永遠に取り去る。10 さあ、立ち去れ。ここはいこいの場所ではない。ここは汚れているために滅びる。それはひどい滅びだ。11 もし人が風のまにまに歩き回り、偽りを言って、「私はあなたがたに、ぶどう酒と強い酒について一言しよう。」と言うなら、その者こそ、この民のたわごとを言う者だ。

彼らは、主が自分たちの味方であり、主は敵を打ち破ってくださると信じていました。けれども、問題は彼ら自身が主に敵対しているのです。ここに書かれているように、一般庶民のいささかの安らぎ、その平安を搾取によって奪い取ってしまったのです。彼らは人々から着物を剥ぎ取り、女（おそらく、やもめ）から家々を奪い取り、また子供たちを奴隷に売らざるを得なくさせるようなことを行っています。律法はこのことを明らかに禁じています（出エジプト 22:26-27）。

しかし彼らは、自分たちが快適な生活をしていることによって、それが主の与えられた安息だと思っています。しかし、主は「ここはいこいの場所ではない。ここは汚れているために滅びる。」と言われます。私たちにもないでしょうか、快適であること、問題がないこと、自分の気持ちがすぐれていること、これらが、主が与えられた平安であると思っています。けれども、罪を犯していたら、惨めにならないとおかしいはずなのです。聖霊が惨めにさせます。偽教師はここにあるように、強い酒について是認する、容認するような教えを垂れます。これこそが戯言であります。

3B 残りの民の招集 12-13

このようにして、主は罪を犯している者は必ず滅びると宣言されました。しかし、主は、真のヤコブ、すなわち主に立ち返る者たちを必ず残しておられます。主は、へりくだり、弱くされている者に与えられている救いのご計画を明らかにしておられます。

12 ヤコブよ。わたしはあなたをことごとく必ず集める。わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。わたしは彼らを、おりの中の羊のように、牧場の中の群れのように一つに集める。こうして人々のざわめきが起ころう。13 打ち破る者は、彼らの先頭に立って上って行き、彼らは門を打ち破って進んで行き、そこを出て行く。彼らの王は彼らの前を進み、主が彼らの真先に進まれる。

主によって、イスラエルの人々は散り散りになることが預言されています。アッシリヤによって、バビロンによって、そして新約時代にはローマによって離散の民となりました。しかし主は、ご自分に立ち返る者たちを一つところに集め、そして勝利者として敵を打ち破ることを約束してくださっています。

ここで、「おりの中の羊」とありますが、これは「ボツラの羊」と訳すことのできる箇所です。「ボツラ」と言えば、預言書の中に数多く出てきた、エドムの首都であった町で、自然の要塞であり、神が裁きをこの町から始められることを語っておられます。イエス様が、ユダヤ地方にいる人々に、「荒らす憎むべき者が、聖なる所に立つのを見たならば、山へ逃げなさい。(マタイ 24:25-26 参照)」と言われました。この山が死海の南にあるボツラ、今のペトラ遺跡の古代都市です。反キリストがユダヤ人を絶滅しようとし、けれども、そこに逃げた者たちは、その地形のゆえに何とか守られます。黙示録 12 章に、「地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。(16 節)」とあります。イスラエルが、患難期七年間の後半、三年半の間、荒野にあるボツラの町で守られ、それから主が天から来られて、反キリスト率いる世界の軍隊に対して戦い始められます(イザヤ 63:1-6)。

そして、とてつもない速さで、ことごとく敵どもを倒される姿が 13 節に書いてあります。「打ち破る者」とは、キリストのことです。主がイスラエルのために戦ってくださるのです。私たちキリスト者も、霊的に羊の群れとして集められています。この戦い多き世において、不条理の中で傷つく人々が多くいます。けれども、ヨハネ 10 章でイエス様が「わたしが良き羊飼いです。」と言われたように、私たちは羊飼いの声を聞いて、羊飼いによる、狼などの敵に対する戦いを経て、それでその群れは前進するのです。

3A 民を食物にする頭たち 3

1B 首領たちの搾取 1-4

1 わたしは言った。聞け。ヤコブのかしらたち、イスラエルの家の首領たち。あなたがたは公義を知っているはずではないか。

ここから、イスラエルを治めている者たちに対する神の言葉があります。1 節から 4 節までが、首領たちです。5 節から 8 節が預言者たちに対する言葉です。冒頭でお話しましたが、上に立っている者は、なぜ上に立っているかと言えば、公義を行なうためです。善を行なう者に報いを与え、また悪を行なう者にもそれにふさわしい報いを与え、そのように正しい裁きをすることによって統治するように召されています。ところが、その彼らが自らの立場を使って、むしろ悪を行なっているという問題です。

2 あなたがたは善を憎み、悪を愛し、人々の皮をはぎ、その骨から肉をそぎ取り、3 わたしの民の肉を食らい、皮をはぎ取り、その骨を粉々に碎き、鉢の中にあるように、また大がまの中の肉切れのように、切れ切れに裂く。4 それで、彼らが主に叫んでも、主は彼らに答えない。その時、主は彼らから顔を隠される。彼らの行ないが悪いからだ。

まさに、彼らが行っていたこと、その搾取は「骨までしゃぶる」という類いのものでした。そして、主はこのような者たちに対して公義によって治めます。彼らが主に叫んだ時に、それに答えないという報いです。彼らは上に立っていますが、実は彼らを立てたのは神ご自身であり、神の公義の中で生きています。自分に自由が与えられている、したいことができる力が与えられている時に、「その自由を誰が与えたか？」を問わないといけません。神ご自身です。神を恐れ敬って、その自由を用いる時に神の正しさ、神の支配が広がり、そこには平安があります。神を認めない者のところには、このように虐げが蔓延します。

2B 預言者たちによる惑わし 5-8

5 預言者たちについて、主はこう仰せられる。彼らはわたしの民を惑わせ、歯でかむ物があれば、「平和があるように。」と叫ぶが、彼らの口に何も与えない者には、聖戦を宣言する。6 それゆえ、夜になっても、あなたがたには幻がなく、暗やみになっても、あなたがたには占いが無い。太陽も預言者たちの上に沈み、昼も彼らの上で暗くなる。7 先見者たちは恥を見、占い師たちははずかしめを受ける。彼らはみな、口ひげをおおう。神の答えがないからだ。

これは、金銭の損得で神の言葉を変える預言者の姿です。自分に何かをくれる者に対しては平和や祝福を祈りますが、何もくれない者には聖戦を宣言します。これは身近な問題であり、献金をしている信者には祝福を祈るけれども、そうしない信者に対しては軽くあしらうのです。ペテロ第二 2 章に、「彼らは貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。(2:3)」とあります。

その報いとして、彼らが辱めを受けます。それは肝心な時に幻が与えられないことです。人々が本当に光を必要としている時に、何の役にも立ちません。残念なことに、墮落したユダの国では、預言者と共にすでに「占い」する者たちもいました(イザヤ 3:2)。しかし、本当に自分たちへの神の言葉が必要な時に何もないので、また自分たちが約束していたことと正反対のことが起こったの

で、彼らは汚れたものとさえみなされます。「口ひげをおおう」とありますが、らい病人が、人々が自分に近づかないように、「汚れている！」と叫ぶ時にするしぐさです(レビ 13:45)。そして哀歌の中で、彼らは、「あっちへ行け。汚れたもの。(4:15)」と、汚れたものとして人々から追い散らされている姿があります。

8 しかし、私は、力と、主の霊と、公義と、勇気とに満ち、ヤコブにはそのそむきの罪を、イスラエルにはその罪を告げよう。

ミカが自分自身のことを宣言しています。偽預言者には力がありません、なぜなら人を罪から解放する力を教えませんかから、その伝えている神は無力な神となっています。しかし、まことの預言者には、「力」があります。そして力とともに「主の霊」、ご聖霊がおられます。パウロはテサロニケの人々に、「なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです。(1テサロニケ 1:5)」と言いました。そして「公義」があります。人々の必要や要求に合わせるのではなく、神の義に合わせるのです。それが彼らの耳を楽しませなくても、語るのです。そして「勇気」があります。人々が反発するかもしれません。迫害するかもしれません。けれども、人への恐れを乗り越えて語り告げるのです。

3B 偽りの神学 9-12

9 これを聞け。ヤコブの家のかしらたち、イスラエルの家の首領たち。あなたがたは公義を忌みきらい、あらゆる正しいことを曲げている。10 血を流してシオンを建て、不正を行なってエルサレムを建てている。11 そのかしらたちはわいろを取ってさばき、その祭司たちは代金を取って教え、その預言者たちは金を取って占いをする。しかもなお、彼らは主に寄りかかって、「主は私たちの中におられるではないか。わざわざは私たちの上にかかって来ない。」と言う。

ここでは、ヤコブの家のかしらたちが、本来ならそこに神が王として君臨されており、その公義が広げられなければいけないシオンにおいて、その神殿のある丘において、彼らは悪を行なっていました。王たちは賄賂によって裁きを曲げ、祭司は律法を教えるものですが、代金を取って教えていますから、それを商売の道具としていたのです。預言者も同じでそれが商売となっていました。イエス様が宮清めをされた時の状況のようです。

そして、彼らの大間違いなのは、「主は私たちの中におられるではないか。わざわざは私たちの上にかかって来ない。」ということです。シオン、エルサレムにおいて神殿があり、そこで宗教儀式が行われているので主がおられるのだ、ということであります。これは偽りの神学です。確かに、「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ 8:31)」という言葉があります。主が私たちの間におられる、聖霊によっておられるということはその通りです。けれども、神から目を背けている状態でも、神は何ら力を示さず、彼らがしたいままにされているのでは決してありません。神は愛しているがゆえに、私たちが吐き出すことさえもあります。黙示録の七つの

教会において、ラオデキヤにある教会では、生ぬるいから吐き出すと言われました。そして熱心に悔い改めなさいと言われました。愛しておられます、ゆえに主は懲らしめられます。

12 それゆえ、シオンは、あなたがたのために、畑のように耕され、エルサレムは廃墟となり、この宮の山は森の丘となる。

紀元前 722 年にアッシリヤによってサマリヤがこのようになったように、エルサレムも同じように単なる畑のようになり、廃墟となるという宣言です。しかし、ヒゼキヤはこの言葉を真摯に受け取り、へりくだって、悔い改めたのでこのことは起こりませんでした。

4A 終わりの日のシオン 4

主はミカによって、再びご自分の御心を示されます。先ほどは、滅びを宣言された直後に、残りの者たちを一つに集めて、その真先を進まれると約束されていました。そして今、エルサレムを流血の罪で満ち、神殿礼拝を利得の手段として、争いを引き起こしている姿と対比して、主が終わりの日にシオンの山に用意しておられる約束をお見せになります。同じような時期に預言したイザヤと、ほぼ同じ幻です。

1B 主の言葉による統治 1-8

1C 異邦の国々に及ぶ平和 1-5

1 終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。2 多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。

ここにあるのが、主の御心としておられるヤコブの家、主の御心としておられるシオンの山です。イエス様が、「御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。(マタイ 6:10)」と祈りなさいと言われた、その御国の姿です。主は、ご自分が王として支配されるために、シオン、エルサレムを選ばれました。そしてそこは高い山です。主がイスラエルに現れた時も、シナイの荒野にあるホレブの山でした。そして、イエス様が御国の宣言を行なわれたのも、山上の垂訓、山の上です。そして、ヤコブの家が立てられているのは、彼らが証し人となって、異邦人たちが主を知ることができるようにするためです。国々が流れてきます。多くの異邦の民が来て言っています。再臨した主を礼拝しに、巡礼に来ているのです。今、エルサレムに行けば世界中からのキリスト者が集まっています。園の墓では、いろいろな言語の賛美が聞こえます。おそらく終わりの日には、それを壮大な規模で見ることができるでしょう。そして、山に神殿があり、その御座にキリストがおられ、異邦人たちに主の道、小道、すなわち律法、教えをくださいます。もともと、ユダヤ人の優れたところは何か？という問いに対して、使徒パウロは、「ローマ 3:2 あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなことばをゆだねられています。」と言いました。

3 主は多くの国々の民の間をさばき、遠く離れた強い国々に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。4 彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の主の御口が告げられる。

その時の彼らが血を流し、アッシリヤに踏みつぶされるという争いがありましたが、御国においては平和が満ちます。神が圧倒的な主権をもって治めておられるので、そして主の教えが広がっているのです。国々は武器を持たなくてよくなります。「その剣を鋤に」とあるように、これまで軍事予算にあてがわれていた国の財産が、農業予算へと変えられます。世界は、平和を平和をと叫んでいますが、平和というのは、私たちの罪を十字架で取り除いてくださった平和の君、キリストが主権をもって治められる時に、初めてやってきます。福音の真理を拒めば、「平和だ」と言っているところに突然滅びが襲いかかるという(1テサロニケ 5:3)、偽のキリストがもたらすものです。

そして、「自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわ」ということは、安心して憩うことのできる、平和で安全な姿を表しています。シャロームを体現していたソロモンの治世において、「1列王 4:25 ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた。」とあります。シャロームとは、単に戦いがないことを示していません。ソロモンの治世のように、あまりにも豊かにされて、また知恵も与えられて、それで戦うという考えさえ抱かなくてよくなっている、満ち満ちた様です。私たちは、時に自分の自我を守るために、人といざこざを起ささないために黙っていることさえありますが、それはシャロームとは程遠い状態です。ところで、イエス様が弟子の一人、ナタナエルについて、「あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」と言われたのは、ナタナエルが主の平和を求めていたことが、自ずと分かります。

5 まことに、すべての国々の民は、おのおの自分の神の名によって歩む。しかし、私たちは、世々限りなく、私たちの神、主の御名によって歩もう。

主の御名によってのみ、このような平和に満ちた国を望むことができます。そして異邦人もまた、この方の御名を呼び求めることによってのみ、平和が来ます。ペテロが、「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。(使徒 4:12)」と言った通りです。

2C 足なえの回復 6-8

6 その日、..主の御告げ。..わたしは足のなえた者を集め、追いやられた者、また、わたしが苦しめた者を寄せ集める。7 わたしは足なえを、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえまで、彼らの王となる。8 羊の群れのやぐら、シオンの娘の丘よ。あなたに、以前の主権、エルサレムの娘の王国が帰って来る。

主がご自分の王国を取り戻される時、シオンの娘にその主権を取り戻される時は、足なえを集めると言われます。足なえのような弱くされている者たちが、強く国民になるべく回復して下さることによって、御国をもたらししてください。それこそが、一時的な国ではなく、とこしえまで続く御国なのです。

ここで興味深いのは、聖霊の働きが足なえを直したところから始まったことです。ペテロとヨハネが午後三時の祈りを捧げに宮に上って行った時に、生まれつき足なえの男が美しの門のところに置いてもらっていました。彼が施しを求めると、ペテロとヨハネは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。(使徒 3:6)」といって、彼はたちまち立ち上がり、歩き出し、はねたりしながら神を賛美していました。これぞ、まさにエルサレムに主権が帰ってくる前ぶれでありました。しかも、人々から商売によって宗教的権威を保っていた、ユダヤ人宗教指導者たちの前で行ったのですから、ペテロやヨハネが強い信仰を持っていただけでなく、足なえ自身が強い国民になっていたとすることができるでしょう。これは聖霊の働き、御国の前触れであって、主が再臨される御国においては、大体的にこのようなことが起こることでしょう。

2B 敵の手からの救い 9-13

1C バビロンからの帰還 9-10

9 なぜ、あなたは今、大声で泣き叫ぶのか。あなたのうちに王がないのか。あなたの議官は滅びうせたのか。子を産む女のような苦痛があなたを捕えたのか。10 シオンの娘よ。子を産む女のように、身もだえし、もがき回れ。今、あなたは町を出て、野に宿り、バビロンまで行く。そこであなたは救われる。そこで主はあなたを敵の手から贖われる。

シオンの娘は、真実な王、公義を行なう王がいませんでした。そのために、子を産む女のような苦痛、すなわちバビロンによって滅ぼされるという苦痛を味わいました。紀元前 586 年のことです。その痛みを経て、身もだえし、もがき回るような苦しみに、それから彼女に救いが来ます。その救いとは、バビロンに捕え移されないということではありません。むしろ、バビロンに捕え移されて、その捕囚の地に住んでいる時に、神がクロス王を通してそれを滅ぼして下さることによって訪れます。そこに、神の救いの手があります。私たちも、この世においてもだえ苦しんでいる中で、そこからの救いを約束されているのではなく、この世の支配者そのものを滅ぼして下さることによって、もたらししてください。

2C 包圍からの救い 11-13

11 今、多くの異邦の民があなたを攻めに集まり、そして言う。「シオンが犯されるのをこの目で見よう。」と。12 しかし彼らは主の御計らいを知らず、そのはかりごとを悟らない。主が彼らを打ち場の麦束のように集められたことを。13 シオンの娘よ。立って麦を打て。わたしはあなたの角を鉄とし、あなたのひづめを青銅とする。あなたは多くの国々の民を粉々に砕き、彼らの利得を主にささ

げ、彼らの財宝を全地の主にささげる。

これは近い未来においては、シオン、エルサレムがアッシリヤによって取り囲まれる時に成就しました。アッシリヤは、エルサレムを包囲しましたが、神が一気にアッシリヤ軍 18 万 5 千人を麦束のように集めておられることに気づいていませんでした。彼らは企み、このことを行なっていました。主はその悪だくみさえも用いられて、ご自分の救いを完成されるのです。そして、これは終わりの日には、全世界的に起こります。ゼカリヤ書に、エルサレムを全世界の国々が襲うことが預言されています。しかし、イエス様が戦われて、彼らは立っている内に、中から腐らせるということを行なわれます(14:12)。そして、倒れた者たちの財宝は、主に捧げられるために用いられます。

イスラエルの残りの民がまるで、打ち場で働く牛であるかのように主は描いておられます。その角が鉄となり、ひずめが青銅となります。打ち場を打つような地味な働きしかできない者たちを、主はその働きの中で、強力な敵をも滅ぼすような偉大さをお見せになります。神は、ご自分の戦いにか弱いイスラエルの残りの者たちを用いたいと願われています。主にあって、私たちキリスト者もこの弱い手と弱い足で、それでも主にあって強められ、強力な敵を圧倒的に踏みつぶすことをしたいと願われています。「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。(ローマ 16:20)」と使徒パウロは言いました。自分には到底、対処することのできない力であっても、主は取るに足りない者、弱い者、愚かな者を敢えて選ばれて、ご自分の賢さと力強さを示されます。